

手損をしないで手得しよう

手損とは

将棋は自分と相手が1手ずつ交互に指すルールがあります。オセロのようにパスはありません。このような性質をもつ将棋ですから、ときに手得手損が勝敗を分けるような大きな意味を持つことがあります。



手損の例をいくつか見ていきます。



それでは次に手損しない指し方を見ていきます。



左の図から

①▲4八飛△3三桂▲3七桂ならば先手は手損せずに4筋を破ることができます。

同じように左図から、②▲2四歩△同歩▲同飛△2三歩▲2六飛（桂跳ねの準備）△5二金▲3七桂でも先手は桂を活用して良い形になります。三歩▲2八飛△3一玉と進めるのも先手が手損して不利になります。

一番ダメな手損

高級な狙いが隠されている場合も？



左の図から

▲4七銀～▲3八銀～▲4七銀～▲3八銀
～▲4七銀～▲3八銀と繰り返すのは悪い
手損です。そんなことをしている間に、相
手にいいように組まれてしまいます。



左の図の場合、

▲４七銀～▲３八銀～▲４七銀～▲３八銀
～▲４七銀～▲３八銀と繰り返す手順は手
待ちの可能性があります。つまり先手の形
が最善形なので、相手の形が崩れるのを
待っている訳です。

しかし左図の場合は、端歩を突いてませんね。端歩はよほどのことがない限り突き得ですから、この場合やはり手損でしょう。